
来るな、孤独。

おりんぴあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
来るな、孤独。

【Nコード】
N5923D

【作者名】
おりんぴあ

【あらすじ】
主人公・藍は四年前に兵庫に行ったはずだった幼馴染の竜と出会う。しかしその竜は四年前とは全然別人だった。

1 嵐（前書き）

楽しんでもらえたら嬉しいです。

1 嵐

爽やかな風が吹く土曜日の午後、引越しの準備をしている少年の家に、仲のよさそうな少女がやってきた。少女も少年も小学生ぐらいで幼い顔立ちだ。

「藍、どうしたの？」

少年は『藍』という名の少女の顔が泣きそうなのに気がつき、話しかけた。

「……だって、竜ちゃん。……遠くに行っちゃうんでしょ？……もう、会えないんでしょ……」

少女は両手で顔を覆い、泣き顔を見せないようにしている。

「夏休みとか……また遊びに行くよ」

「……私も、遊びにいくから」

「ぷはは！ 藍は、方向音痴だから俺の新しい家まで、来れないんじゃない？」

『竜ちゃん』と呼ばれた少年が藍をからかうように言った。重かった空気が一瞬にしてゆるんだ。

「ひつどい！ 竜ちゃんのばあーか！」

「なっ！ 俺、藍よりは頭いいぞー」

「そういう事言ってるんじゃないの！」

藍はムツと顔をゆがませた。それを見た竜は大声を出して笑った。そして突然、真剣な顔になった。

「元気だな」

「うん。竜ちゃんもね」

「あれからもう今日で四年なんだよ。遊びに来るとか言って、一回も来てないのよ！ 竜ちゃん……」

ムスッと顔をゆがめて長髪の少女が言った。

「あつはつは！　それが藍の幼馴染？！　傑作だねッ！」

長髪の少女の横を歩いているポニーテールの少女は爆笑した。そしてその大きな声が朝の道路に響く。

「もう智子ったら！　……笑い事じゃないわよぉ！」

長髪の少女　藍はため息をついた。もう中二になってしまった、と改めて思った。

藍と、ポニーテールの少女　智子はいつもと同じように、まったりと風を感じながら登校している。

「そう言えば今日、転校生来るわよね？　ふふ、イケメンに期待ね」
智子は話題を変えて自分で盛り上がっている。

藍は空を見上げて、呟いた。

きつと、元気よね。竜ちゃん。

「前口竜、です」

藍は驚いた。もちろん他の女子達も期待以上のルックスの『前口竜』にキヤーキヤーと黄色い声を出していた。

しかし、藍はそういう意味で驚いたのではない。

竜……ちゃん……？

整った顔立ちに綺麗な瞳。いつもバレンタインの日は女の子から紙袋いっぱいチョコレートをもらっていた幼馴染の竜にそっくりの顔だった。

……違うよ！　竜ちゃんの名前は『後藤』だったもん。

藍は自分で自分の思いを否定した。

「前口さんは、兵庫県から来たんだけど。小学校四年生までこの辺に住んでいたのよ」

前口が名前以外は言おうとしないので、担任の小松先生が変わりに紹介した。「そうなんだ」と言うキャピキャピ声が教室中に響く。

やっぱり……竜ちゃんなの……？

小学四年生の時、兵庫県へ行った。藍の幼馴染の竜と同じだ。

前口は自分の名前だけ紹介すると、すたすたと歩き、空いている席に座った。そこは窓際で智子の隣の席だ。

智子は嬉しそうに前口を見た。

「私、夕風智子。よろしくね！」

智子はキャピキャピの声をだしてアピールした。

前口は、不機嫌そうに智子を睨んだ。

「……なんだよ、お前。俺に話しかけるな」

それだけを言うと前口は頬杖をついて窓の外の風景を見下ろした。よく響く前口の声は皆の耳にも届いていた。

そして、先生や他の生徒達は呆然と前口を見た。

休み時間は皆、怖がって前口に話しかけなかった。しかし、それがまたカッコイイ！と智子も含め女子達は群がっていた。他のクラスからも前口の顔を拝みに来る人もいる。

藍はそんな前口をぼーっと見ていた。

やつぱり……竜ちゃんなのか聞いてみたほうがいいよね？で

も、さっきの智子への言い方とか聞いてると、人達だよね……？

竜ちゃんはあんな事言わないし……。

藍が葛藤していたとき、智子がやって来た。よく見るとその後ろにクラスの女子達が藍の周りを囲んでいる。

「なっ！なに？」

藍の声は裏返った。

「ねえ、藍だったら前田君に話しかけられるでしょ？委員長なんだし！」

智子がケラケラ笑って言った。そしてその後に居る女子達が「いいんちよーう」と声を合わせた。

藍は頼まれると断れない、と言う欠点があった。委員長と言うのも、頼まれてしまったものだ。

「わかったわよお……」藍はそう言って、不機嫌そうに座っている前口の近くまで行った。女子達はもちろん、教室にいる男子までも

が藍に注目している。

藍はひんやりと汗をかいた。そしてゆっくり深呼吸をした。

「竜ちゃん？」

囁くような小さな声で言った。もう少し違う事を言えばよかった、と後悔した。そして、いきなり「竜ちゃん？」なんて聞かれては相手も困るだろう、とまた後悔した。

しばらくの間、教室は静かになった。藍が何をいったのか、智子達やクラスメイト達は聞き取れなかったが、何かを言ったことは誰でも分かった。

そして前口は口を開いた。

「……俺、後藤竜じゃないぜ」

前口はとても怖い顔をして藍を睨んだ。

「え？……ご、ごめんなさい……」

その迫力に藍は思わず謝ってしまった。

しかし前口は藍の言葉を無視して教室から出て行った。

……なんなの。あの人……なんで竜ちゃんじゃないのに……竜ちゃんを……知ってるの？

藍は何がなんだか分からなくなり、とにかく絶望した。

前口が転校してきてから十日が経とうしていた。

藍は、もう前口を見ない事にした。見ると、いろいろ考え込んでしまうからだ。

そして今朝、思いもよらず藍の下駄箱に手紙が入っていた。差出人はE組の『藤岡武』だった。

「いいなあ、藍！ 藤岡君って言ったら、スポーツ万能、野球部のキャプテンじゃない！ 顔も親衛隊が付くぐらいの美少年よ！ くそッ！ 狙ってたのに！」

智子は手紙を見せるなり、すぐに『ラブレター』だと決め付けた。

「ちっ！ 違うわよ！ 私、藤岡って人なんて知らないし！ 多分、藤岡って人も私の事知らないわよ！」

藍は必死に否定した。

「馬鹿ねー藍！ 知らないのに、なんでアンタ宛にラブレター書くのよ！」

「らっ！ ラブレターじゃないってば！」

「どう見てもラブレターでしょ？ 『ずっと気になってました。今日の放課後、校門で待ってます』 っだってー！ いやーん！」

智子は藍を挑発した。その声を聞いて他の女子達が「なににないにいゝ？」と寄ってきた。

まったく……

藍は深いため息をついた。

「近藤さん！」

いきなり後ろから、名字で呼ばれたので藍は驚いた。普段は「委員長」か「藍」の二つしか選択肢がなかったかのようだったからだ。だから先生までもが藍の名字ではなく「委員長」と呼ぶ始末だ。

「だっ誰？」

藍は不意に大声を出した。

そこには、少し栗色がかった髪に女性のような顔つきの優しそうな少年が立っていた。

「藤岡武って言います！」

……え？ この人が……藤岡……。た、確かに美少年……。

藍は感心したように藤岡の顔を見た。

しかし、どんどん恥ずかしくなってきたので藍は藤岡に話かけた。

「私の下駄箱に手紙入れたの……君？」

藍は言葉を選びながら、少しずつ距離を置いた。

藤岡は顔を真っ赤にして、いきなり藍の手をつかんだ。

う……何、コイツ……

思わず藍は、一歩後退りをした。

「僕と　付き合ってくれないかな……」

藤岡は真剣な顔で藍に言った。

智子に言われた通りの展開に、藍は少し苦笑した。

「おかえりい〜！」

藍が家に帰ると、小さな女の子が藍を出迎えた。

「ただいま〜理恵は元気ね……」

「うん。元気だよー。あれれー？　おねえちゃんは元気ないね〜」

藍の妹、理恵はお絵かきをしていた途中らしく、腕には緑色のクレヨンがべったりついていた。

藍は時計を見た。もう六時だった。

はあ……私って馬鹿だ。智子の言った通り。

「あら〜遅かったじゃない？」

「ごめんなさい、お母さん。ちよつと委員会の仕事があつて……」

藍は言い訳をした。

藤岡に告られ、そのうえ野球部の練習を見てた……なんて、言えない……

藍は苦笑しながら自分の部屋に入った。藍はお気に入りのMDをかけて、ベッドに座り込んだ。

藤岡にオツケーしちゃった……。

藍はため息をついた。そしてベッドに横になった。

いつも、断れない。自分の意見を言わない。……ずるいね、私。

藍は瞳を閉じてもう一度、藤岡の顔を思い出した。

しかし、藍はいつのまにか、竜の顔を思い出していた。

「おっはようー！ 藍！」

智子は寝不足の藍に元気よく挨拶をした。
いつも元気な智子だが、今日は一段と元気だった。

「うう……おはようー」

藍はいつもの四ぶんのーぐらいの声で言った。

「で？ 藤岡君と、どうなった？」

智子はいきなり訊ねた。

藍は少し戸惑ったが智子らしいか、苦笑した。

「付き合ってたって言われたよ」

藍は恥ずかしそうに下を向く。

「ええ！ やっぱり！ で？ 藍はなんていったの？」

智子は興味深々と言うように目をぱっちり開いた。

藍は下を向いたままだ。

「うん……って……、言った」

すると智子が飛び上がった。

「キャーーーーー！ カップル成立ね！ ヒューヒュー！！」
すると藍の顔がいつきに赤くなった。

「ちょ……ちょっと！ 智子！ 大声出さないでよあ！」

藍は智子の口をおさえたが、あまり効果がなかった。

藍と智子は坂道を登って、学校の校門までたどり着いた。

まさか、朝だし、校門で待つてないよね？ 藤岡。

「近藤さん！ おはよう！」

藍の予想は裏切られ、昨日よく聞いた少年の声が響いた。

「キャ！ 藤岡クーン！ 私、藍の親友の夕風智子っていいます！
藍に飽きちゃったら次は私をよろしくねえー！」

智子はキャピキャピと藤岡の近くまで寄って行き、アピールした。
しかし、そのアピールは藤岡まで届いていなかった。

藤岡はニコニコ微笑んで、ずっと藍を見つめている。

ちよつと……！ 私ばかり見ないでよお！

藍は藤岡に見られているのに気付き、下を向いた。しかし藤岡は下を向いた藍の顔を覗き込んで微笑んだ。藍の顔は真っ赤になった。

藍の顔を見て、智子はププッと吹いた。

「じゃ、先に教室行ってるねー！ ばいばーい藍！ 頑張ってるねー！」

智子はケラケラ笑って走っていった。

「ありがとね、夕風さん」

藤岡はニコニコしながらは智子に手を振った。

ちよつとお……智子！

藍はため息をついて顔を上げた。

すると藍は、藤岡の横を通りすぎていく影と目が合った。

『前口竜』だ。

藍はすぐに目をそらした。藍は、関わりたくない気持ちと、幼馴染の竜ちゃんなのか、という疑いが心をかきまわるのが苦しかった。

あんなのを見るよりは、藤岡の方がマシだもん

藍は深呼吸して、藤岡と教室まで行った。

藤岡は話し上手で、会話がつきることはなかった。

「帰りは、先に帰っていい？ 塾あるし」

藍はB組の教室の前までくると藤岡に伝えた。

「うん。わかったよ。じゃあね、近藤さん」

藤岡はニコニコして藍に手を振った。

藍も苦笑しつつ、手を振った。

「委員長！」

藍は自分の事だと分かり、振り向いた。

そこには、眼鏡をかけた女子生徒が仁王立ちをしていた。

「なに？」

藍は訊ねた。すると訊ねられた眼鏡女子生徒が突然大きな声をだした。

「だめですよ！ 絶対！ 絶対！ 許しませんよ！」

藍は女子生徒がなぜ怒っているのか大体分かった。

……あれね……藤岡の親衛隊ね。これでイヤミ言われるの四人目……

しかし藍の予想は大いに外れた。

「私の中での近藤委員長は『天然かつフリーの優しい委員長チョー』なんですよ！ なのに！ あんな野球部のオトコに心奪われるなんて！」

馬鹿にしているのか、と藍は思った。しかし女子生徒が半泣きなので藍は驚いた。

「ぶっはっははっは！ 由美子！ それは大げさだって」
後ろで智子が爆笑していた。

「智子は黙ってっ！ 私、本気なのよ！ 委員長！」

由美子と言う女子生徒はまた大声をだした。

教室でノンキに雑談していた人達の視線が、藍に刺さった。

……うっ、意味不明……とりあえず笑ったところか……

1 嵐（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
よかったです感想をお願いします。。+（、√、人）+。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5923d/>

来るな、孤独。

2010年10月11日11時57分発行